

## くまがや風土記 4 熊谷市内の武士団

『熊谷市史』資料編2の世界

熊谷市史編さん室 蛭間健吾

熊谷市では、平成38年度までに、あらゆる時代・分野にわたる17冊の『熊谷市史』を刊行する予定です。

このたび、その第一冊となる「資料編2 古代・中世」を刊行しました。日本史研究の第一線で活躍する12人の研究者の方々に調査・執筆をしていただいています。

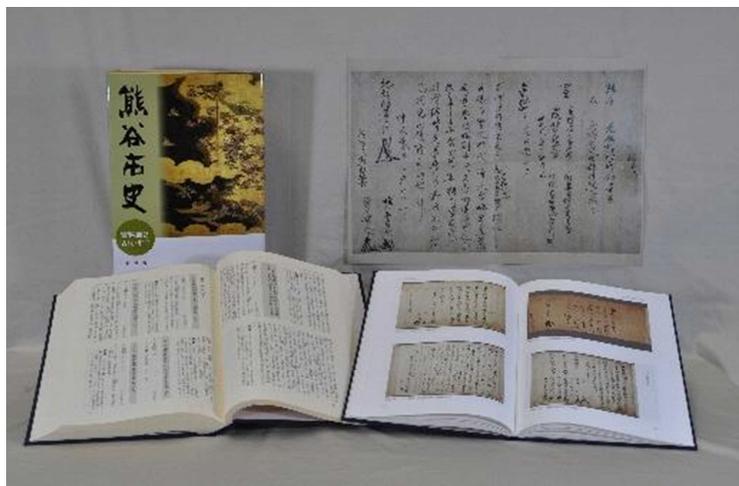
熊谷は、県内でも一、二を争う歴史の豊富な地域です。「資料2」で取り上げた「古代・中世」という時代(500年～1590頃)は、文字で書かれた資料があまりない時代ですが、幸い熊谷に関する資料は多く残っており、800ページ1,200点の資料を掲載できました。各資料には、分かりやすい解説を付けてあります。

また、熊谷氏や別府氏といった熊谷ゆかりの武士団が、多くの古文書を今にまで伝えていています。「資料編2」には、こうした200ページのカラー写真集を付けました。県内はもちろん、全国的に見てもあまり例のない試みとなっています。

今回は、この「資料編2」の主人公ともいえるべき「熊谷市内の武士団」について、少し紹介します。

熊谷市内は、古くから大きな道が走り、また湧水が多く出るなど、水の豊富な地域でした。こうした背景から、熊谷の地名を名乗る多くの武士団が登場します。

これらの武士団は、だいたい小さな武士団でした。武士団というと何百、何千騎を引き連れて戦場に向かう姿を想像されるかもしれませんが、多くて数十騎、中には数騎で出陣した武士もいました。熊谷直実は、平敦盛を討った一ノ谷の戦いで、自らと息子を含めた三騎で戦場に向かったと伝えられています。



では、いくつかの熊谷武士団を紹介します。

一番初めに熊谷の地名を名乗る武士として登場するのは「村岡良文」です。乱を起こして一時は関東を席卷する平将門の叔父にあたります。彼の子孫は、市外の地では畠山重忠の秩父平氏や三浦氏、千葉氏など大武士団に成長します。なお、この後、村岡は関東を代表する大都市になります。

現在の熊谷駅周辺の地域を支配したのが「熊谷氏」です。皆さんご存知の熊谷直実は、源平合戦で関東武士一を争う活躍を見せます。子孫は、広島や滋賀、宮城などに所領をもらい、一族を全国に広げます。特に広島の熊谷氏は、戦国大名毛利氏の重臣になり、彼らが残した「熊谷家文書」は、武士の文書として、東日本随一の数を誇ります。

妻沼聖天山を開いたとされる斎藤実盛を輩出したのが「長井斎藤氏」です。名門の出であった実盛は、当時の交通の要所であった長井（現妻沼）を治めました。源平合戦で最後まで平家方として戦い、若者に侮られないように髪と髭を墨で染めて出陣した話は、戦前の小学校唱歌になるほど有名な話です。

熊谷武士団の中で一番出世したのは「中条氏」です。流人時代から源頼朝に仕え、厚い信頼を勝ち取りました。中条家長は、鎌倉幕府の最高機関評定衆の一員に選ばれています。その子孫も、鎌倉・室町幕府の要職を歴任しました。「久下氏」は、熊谷直実が育った家です。熊谷久下に残る一族もいましたが、丹波（兵庫県）に移った一族は、室町将軍の足利尊氏・義詮父子を助ける活躍をしています。

成田・別府・玉井・奈良の四氏の祖は四兄弟で、「藤原四家」と呼ばれています。

「成田氏」は、映画・「のぼうの城」で有名になりましたが、忍城（行田市）に移る前は、熊谷成田を本拠としていました。戦国時代に北埼玉の支配者となります。

「別府氏」は、現在も跡が残る別府城を本拠としました。熊谷武士団のほとんどが、勢力を失ったり、一族の中心が熊谷から離れる中、400年以上、別府の地を治め続けました。

「資料編2」には、こうした武士団の活躍が多く描かれています。各公民館にもお配りしましたので、ぜひ、お手に取ってご覧ください。

（熊谷市公連だより 第15号 平成25年より）